

地域と研究者をつなぐ「江湖館オープンハウス」の取り組み

西村 和代

(博士後期課程 2008年度生)

はじめに

2006年度、同志社大学大学院総合政策科学研究科に新設されたソーシャル・イノベーション研究コース（以下SI研究コース）では、実践的な研究活動を行うための学外施設を設けている。その一つに、「江湖館（こうこかん）」と名付けられた京町家がある。ここでは、大学院の授業や研究会が行われる他、院生たちによる様々な実践的研究が繰り広げられている。そこで本報告では、2006年度の開館当初から行われ、昨年度から定期的な開催となった「江湖館オープンハウス」の取り組みについて述べ、院生たちと地域との関わりを紹介する。

1. はじめての「江湖館オープンハウス」 ＜2006年5月開催＞

オープンハウスというと、建て売り住宅が見学できるのかと誤解されることがある。そのように使われていることが多いということもあって、なぜ大学の施設をオープンにする必要があるのかと問われ、理解を得るまで説明することもしばしば起こる。そこで本報告の最初に、オープンハウスとは何かを紹介しておきたい。オープンハウスとは、自宅を解放し誰でも来客を気軽に迎えてもてなすパーティーといった意の他に、学校や施設などの一般公開日という意がある。その他にも、後述していくなかで江湖館におけるオープンハウスの意義や考え方を示していくことにする。

江湖館は、京都市中京区にあり、烏丸丸太町交差点より3筋西の衣棚（ころものたな）通り

に面して建つ築80年を越える伝統的な京町家である。周辺は、居住専用地域ではなく職住近接であり、市街地にも近い地域である。しかし、突然居住している側に大学施設ができたのであるから、とりわけご近所の方は興味も関心も抱いていただいただろう。もしくは、迷惑施設とまらないか、心配された方もあるのではと察する。そして、大学院の授業は夜が多く、昼間はひっそりとしているが夕刻から賑やかだ。そうした特徴もあり、普段から施設の見学はもちろん、一般の方が利用する機会はそうそう無かったし、設定していないというのが現状であった。そのような状況を少しでも良くし、理解を得て、地域に開かれていくためには何をすべきなのかを教員と院生が共に考えはじめた。そうして企画されたのが「江湖館オープンハウス」である。ご近所の方々、関心を寄せてくださる方々に江湖館を公開し、ここで行われている研究活動の一端を紹介する機会とした。そしてそこからは、多様な接点生まれ、新しい出会いのなかで研究のヒントを得ることもあった。

はじめてオープンハウスを企画したのは、江湖館を開館して間もない2006年5月である。地域の方にも来ていただきやすい工夫を凝らして、文字通りオープンした。当時の記録によると約80名の方にご来館いただいている。準備した中には、土間で行うお餅つきや子どもが遊ぶことのできるコーナーを設けており、気軽に入っていただくことができた。初年度は院生が少なかったこともあって、江湖館開設にご協力くださった方々をはじめ、政策学部の学生にも手伝ってもらった。その時に関わってくださった方が、その後SI研究コースへ入学されたというつながりも生まれている。

2. 定期開催となった「江湖館オープンハウス」＜2008年5月～現在＞

2006年度には3回開催した「江湖館オープンハウス」だったが、2007年度は一度も開催されることがなかった。開館して1年経つと、地域の方々にもそれなりの周知がなされてきたということもあったが、何より開催するための担い手がなかった。その他の催しは何度か開かれてきていたが、気軽に来館でき、ゆっくり座ってお茶を飲んでいただきながら語らうといったことはオープンハウスならではのものだ。そこで、2008年度が始まり、筆者も博士後期課程に進学したことから、再開を決めた。入学したばかりの院生たちと協力して、いかに継続的に取り組めるかを検討し、毎月開催を目標にして運営ミーティングも行った。各自の研究や関心事を社会に発信する機会とも捉え、積極的にやりたいことを出し合った。

そうして、2008年5月から現在まで毎月1回の「江湖館オープンハウス」が定期開催されている。プログラムは、市民メディアの発信から、クラフト教室、障がい者授産施設作品の販売、プチネイルサロンまで多様である。その中で、必ずコアになっているのが「食」である。町家の中でお茶やジュースを飲みながら休憩したり、野菜やお米、果物などの産地直送販売を行うなど、「食」のコーナーは人気となっている。院生たちは、自分が企画出展している場合もあるし、運営を手伝うということもある。そのなかで、出会いを楽しみ、地域の方々とのコミュニケーションを図ってきた。定期開催となったことで、リピーターも現れてきたのだが、広報面が弱く、「次はいつあるの?」と聞かれ、慌てることも多かった。プログラムがマンネリ化してくることも改善していかなければならない。とはいえ、来館くださる方の中には、開館から3年経ってはじめて中に入ったというご近所の方もいる。また、大学のホームページでもイベント紹介をしてもらおうと、同窓生が訪ねてくださる。そうしたつながりを大切にしていくことはもちろん、一つの取り組みを結実させていくことは、地域にも研究にも多くの示唆を見いだせると確信している。

3. 今後の取り組み

昨年度1年間の取り組みをさらに継続していくには、より地域と関わりを深めていくことが重要となってくるだろう。新しく入学した院生たちが、大学施設をオープンにすることの意義を感じ、地域との関わりの中で自らの研究にどれだけ惹き付けていくことができるのかは、今後の取り組み次第である。同時にSI研究コースでは、地域や社会の問題を発見し、解決にむけた行動型研究者がそれぞれのフィールドにおいて活動している。しかし、江湖館という場においては、各自のフィールドに通じるノウハウを掴むため、実験的なプログラムを行うことも可能であると考えている。実際、この場でのプログラムを実践研究につなげていった動きも起こっている。そして、家族や友人にも江湖館に足を運んでもらい、自らの研究を理解してもらう機会になっている。「江湖館オープンハウス」が、何が飛び出すかわからない玉手箱となって、大学関係者にも地域の方々にも常に注目される催しでありたい。そこから、開かれた大学の姿が示され、地域でのサポーターを増やしていくことにもつながると考えている。

おわりに

以上、「江湖館オープンハウス」の取り組みを紹介してきた。江湖館では、地域の自治組織である町内会にも入れていただき、昨年度は組長の当番も担わせていただいた。また、毎年行われる町内行事にも教員や院生たちが積極的に参加している。そうした人的な関わりと物的な江湖館が、地域の力になっていく実感がある。大学施設が町内にやってくることなど、そうそうあることではないだろう。そのように考えると、江湖館が地域に受け入れられ、その地域のポテンシャルとして存在し、ひいては大学と地域を結ぶ機能が期待されるのである。

最後に、江湖館という名前の由来を紹介しておこう。SI研究コース開設に尽力した教授の今里滋の言葉である。

東島誠『公共圏の歴史的創造』（東京大学出版会、2004年）を読んでいたら、「明治期に

おける江湖の浮上」という節に、「江湖」とは、「読書し、論議する公衆が形成する言説の空間」であり、そこに「開かれた公共性のポテンシャル」があるとの指摘がありました。その意味では、「江湖」こそ、われわれが目指す公共空間の理念ではないか、と思います。

こうした理念に基づき、「江湖館オープンハウス」がネットワークから生まれるソーシャル・イノベーションを具現化していく仕掛けとなるよう、工夫を重ねていく取り組みとしていきたい。



写真1 2008年5月 江湖館全景



写真2 2006年5月 落語を楽しむ



写真3 2008年8月 産地直送食材の販売